SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

不謹慎な模型 (誌上シンポジウム 危機と人間)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原田, 伸一朗 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009225

誌上シンポジウム

不謹慎な模型

A Note on the Morality of Plastic Models

原田伸一朗
Shinichiro HARATA
静岡大学大学院情報学研究科・講師
harata@inf.shizuoka.ac.jp

1. はじめに

「危機と人間」というシンポジウムの共通テーマを受けて、筆者は「危機に対し人間はいかなる“文化”的受容を試みるか」という視角を設定し、それを検討する具体的素材として、「模型」（特に戦車や軍艦、軍用機などのプラスチックモデル）を取り上げた。

かねてから本学で筆者が担当している「情報管理社会論」という講義では、「戦争と芸術」というトピックで「戦争画」を紹介し、作品そのものを味わうだけでなく、それが描かれた状況や、（戦後にビビッドに提起された）画家のモラルをめぐる議論にも触れてきた。藤田嗣治と小松崎茂という、ある意味対照的な2人の絵描きの戦後を追うとともに[1]、村上隆、会田誠、Chim↑Pomといった現代美術作家たちが「戦争」をどのように扱っているかをも紹介することで、「戦争」という危機的状況に対する芸術家の意識・態度について、受講生に考える機会を提供している。

今回のシンポジウムで「模型」を取り上げたのは、その講義の補遺編という意図もあった。プラスチックモデル（以下プラモデル）は大量生産される工業製品であるがゆえに、「アート」という文脈では扱われにくいものであるが[2]、戦争や危機の表象である点と、そこにモラルの問題が潜んでいるかもしれないという点で、「戦争美術」や「原爆美術」「3・11後のアート」などと地続きのメディアであるように思われたからである。

2. 原爆ドームのプラモデル

プラモデルは、大別して、実在の車両や機体、建造物を縮小して再現したスケールモデルと、架空のロボットなどを題材としたキャラクターモデルに分かれる。特にスケールモデルは、実物のリプロダクション（再現物）であるがゆえに、あくまで「模型」であるにもかかわらず、実物にまつわる「事実」の持つ強力なメッセージ性を帯びることがある。模型には、「なぜそれを模型化したのか」というメタ的な視点がつきまとい、そのセレクトによっては、一見“不謹慎”なのではないかという感想を持ってしまうこともある。

そのことを筆者が初めて意識したのは、中学時代にナチス・ドイツ軍のパンター戦車やⅣ号戦車のプラモデルを作っていたときではなく、修学旅行のメッカでもある広島平和記念資料館の売店にて、「原爆ドーム」のプラモデルが販売されているのを知ったときである[3]。この模型は「ネタ」なのか「マジメ」なのか、正直すぐには判断がつきかねた。原爆ドームは世界遺

産ともなっている著名な建造物であるから、「姫路城」などのお城のプラモデルを作るのと同じ感覚で取り組むべきものなのかもしれない。ただ、この模型のパッケージには「監修広島市・広島市教育委員会」とクレジットがあるため、やはり「平和教育」の一種の教材として捉えるべきものであろう。それでも、わざわざ被爆後の廃墟を再現するということに、メーカーの真の意図はどうあれ[4]、一抹の不安を感じざるを得ないキットであった。

ともかく、この「原爆ドームのプラモデル」という不思議な商品を知ってから、戦禍や兵器を「模型化」し、趣味や娯楽として楽しむことに、何かしらの“不謹慎さ”が潜んでいるのではないかと意識せずにはいられなくなった。

3. “不謹慎”なプラモデル

長じるにつれ、模型製作そのものからはしばらく遠ざかってしまったが、どのような模型が製品化されているかについての情報収集は続けてきており、時勢をとらえた話題性のあるキットが発売されれば、一種の「ネタ」としてコレクションするようになった。シンポジウムでは、「不謹慎なプラモコレクション」として、そうしたキットのいくつかを紹介した。

(1) B-29 戦略爆撃機

B-29 は「日本人にとっての悪夢」とも言える機体であるが、海外メーカーのみならず、国内メーカーからも複数のキットが発売されていたのは意外でもあった[5]。例えば、現時点で入手可能なものの一つとして、フジミの 1/144 キット（1995 年 8 月発売）があるが、このキットには、あの「エノラ・ゲイ号」を再現するためのデカール（シール）や、果ては同機に搭載された「原子爆弾（リトルボーイ）」のパーツまでもが付属していた。

このキットはこの世に存在してよいものなのであろうか。静岡県が誇る世界の模型メーカー・タミヤの会長は、「B-29」だけは自社で模型化しないと語っている[6]。

(2) ロシア原子力潜水艦クルスク

2000 年 8 月 12 日に、ロシア原子力潜水艦「クルスク」が沈没事故を起こした。乗員 100 名以上が死亡、海中に生き埋めにされるという大惨事にもかかわらず、タミヤからしれっと 1/700 で模型化されている（2001 年 10 月）。ほかに当地ロシア含む海外メーカー数社からもキットが発売されている。

これに限らず、たとえ悲惨な事故を起こした機種であっても、それも実機にまつわる一つのヒストリーとして物語化されたうえで、模型化はやむことはない。それをいちいち“不謹慎”と言うならば、最近トラブルが相次いだ B787 のような民間航空機や、衝突事故を起こした鉄道車両等の模型化も慎むべきことになってしまうから、さすがに過剰反応なのかもしれない。

(3) 海上自衛隊護衛艦あたご

2008 年 2 月 19 日に千葉県勝浦市の民間漁船と衝突、沈没させた海上自衛隊のイージス艦「あたご」も、ピットロードから 1/700（2007 年 12 月）、事故後にも、同じくピットロードから 1/350（2010 年 11 月）、アオシマから 1/700（2013 年 3 月）のキットが発売されている。

余談であるが、特に近年のアオシマ製のウォーターラインシリーズ（1/700 の洋上艦船模型シリーズ）は、（北朝鮮の）不審船や弾道ミサイル、尖閣諸島付近で衝突事件を起こした（中国の）漁船などの模型をおまけとしてキットに封入したり、ボックスアートにも、近年の緊迫した東アジア情勢を反映したかのようなモチーフを描き加えたりしている。ある意味、危機を“嗤う”態度とも言えるが、本気で周辺諸国が問題視し始めれば、ネタや悪ふざけでは済まなくなるかもしれない。所詮は玩具であると言っても、玩具であるならなおさら「子どもへの影響」が大きく語られてしまう（実際には今やプラモデルは大人の趣味であるが）。ま

た、もしプラモデルに本気で国防意識を反映させようとしての挙であったとすれば、なおさらジョークとして批判をかわすのは難しくなる。

(4) V-22 オスプレイ

アメリカ軍輸送機オスプレイは、事故が多いという印象もあって、国内配備に対し沖縄県を中心に強い反対運動が起きている。この特徴的な外観を持つ輸送機も、イタレリ（イタリアのメーカー。国内販売代理店はタミヤ）から 1/72 および 1/48 で模型化されている。しかも一時期はアマゾン等で品切れとなるほどの人気で、増産もされ、国内配備仕様を再現するためのデカールを新たにセットした商品も発売されている（2012 年 12 月）。また、良かれ悪しかれオスプレイの話題性が高まっているこのタイミングで、普天間基地にも配備されている現用機を忠実に再現した 1/72 のキットがハセガワから発売された（2013 年 7 月）[7]。

4. 兵器模型のメッセージ性

模型そのものに罪はないが、「ガルパン[8] 特需」のおかげもあり、最近、戦車の模型が飛ぶように売れているという。プラモデルはただの（ただし極めて精密な）プラスチック部品の寄せ集めであるが、だからといってメッセージ性が皆無ではない。製品化する機種をセレクトするメーカーのねらいや、製品を購入して組み立てるユーザーの意識を抜きにしては語れないのが現代の模型文化である。それを売ったり買ったり作ったりする人になにがしかの倫理性が問われるのは、むしろプラモデルがメディアであることの証と言えるであろう。

模型も表現物であり、メディアである。物言わぬ単なるミニチュアではない。実機があり、そこに戦禍や災害といった歴史的背景が随伴している。そのような背景をも丸ごと引き受ける「模型化する」という行為にはメーカーの倫理性も問われる[9]。もちろん、それを買って楽しむユーザーもである。プラモデルマニアには、キットを史実に忠実に再現するために、専門資料を求め、プロ顔負けの考証を行う者も多い。キットの組立説明書に実機の解説が記載されているのも[10]、実機への興味に応えるためである。また、模型単体ではなく、ジオラマ（情景）仕立てで製作するとき、そこには戦車や軍用機そのもののデザインへの興味だけではなく、それがどのようなシチュエーションで使用されたかという物語や文脈に対する意識が前景化されているはずである。例えば、先ほど紹介した原爆ドームと B-29 のプラモデルを組み合わせて、「広島への原爆投下」を情景として再現することも不可能ではないのである。

戦前、木材を使用した模型飛行機が学校教材として採用されており、競技会なども盛んに開催されていた。国防意識･航空思想の普及など、模型作りの持つ教育効果が多分に意識されていたのである。戦後、GHQ が模型飛行機の製造を禁止したのは、日本人が再び軍国思想に感化されることがないようにするためだという言説からも、事実はどうあれ[11]、兵器模型が持つメッセージ性を強く意識する文脈の存在をうかがわせる。

考えてみれば、軍事マニアやミリタリープラモマニアは、自らの趣味の対象物が “不謹慎” な代物であること、世間から“好戦的”“軍国主義” といった偏見にさらされることには極めて敏感であったはずである[12]。戦車や飛行機（あるいは美少女）が好きで好きでたまらないが、そのような趣味は“恥ずかしい”ものであり、“世間様” に堂々と顔向けできるものではないというアンビバレンスをオタクは常に抱えてきた。ある意味それを創作の原動力にして、最も偉大な達成を繰り返してきた人物こそ、アニメーション映画監督・宮﨑駿である。

その最新作「風立ちぬ[13]」においては、零戦の設計者である堀越二郎らをモデルとした人物が主人公となり、「美しい飛行機を作りたい」という夢と、設計した飛行機が戦争の道具として使われるという現実の狭間で、彼がどう時代

を生きたかが描かれている。蛇足であるが、こうした映画のブームで零戦のプラモデルがまた売れているのは、必ずしも宮﨑の望む結果ではないような気がする。

5. 震災と“不謹慎厨”

日本の敗戦を象徴するモニュメントが「原爆ドーム」であるなら、“第二の敗戦”をこの上なく象徴する建屋は、「福島第一原子力発電所」しかないであろう。その模型化は「アリ」なのだろうか。もちろん、ニュース解説用に、福島第一原発を再現したワン・オフモデル（一品もの）は作られている。しかし、それをキット化するとしたらどうか。オウム真理教の一連の事件の際、その象徴とも言える施設「第七サティアン」（サリン工場）をプラモデル化したら売れるのではないか、といった冗談が交わされたこともある。もし実現していたら、大人の良識が疑われたことであろう。福島第一原発を「サティアン」と失言した政治家もいた。福島第一原発は現在進行中の危機でもあり、その模型化の“不謹慎さ”は半端ないレベルであろう。

しかし、すでに福島原発をモチーフ（ネタ）にしたアートも登場しているし、福島原発を「観光地化」する計画もある。“不謹慎厨”（なんでもかんでも“不謹慎”と批判する人）を乗り越えてこその文化・芸術であり、戦争や大災害、事件は、むしろ芸術創造の大きな動機にもなる。

東日本大震災で被害に遭った建物や漁船を「震災遺構」として残そうという話は各地で出たが、被災者の心情への影響や、費用面の問題などから、多くは立ち消えになっている。しかし、あの原爆ドームでさえもが、当時は解体するはずのものであった。“不謹慎”と言われながらも、後世のために保存するべきだという意志の力で、現在も被爆当時の姿で残り続けているのである。

6. おわりに

筆者は法学の研究者であり、様々なメディア事象における「自由と規制」「法と倫理」を主要テーマとして研究している。筆者自身、年季の入ったタミヤファンであり、ガルパンファンであり、本稿は“不謹慎”な模型を法的に規制しようという意図からくる論稿では全くない。しかし、倫理的には払拭しきれない“何か”が残ることもたしかである。そこから目を逸らすことは、むしろ趣味に対して不誠実な態度である。

近年、法的に規制されていなくても、「自粛」「自主規制」という形で表現が規制されているメディアは多く、モラル規制が過剰と思われる例も見受けられる。その逆に、倫理観にのみ任されているため、無邪気過ぎてモラル規制が適切に働いていないように思われる例もある。〈法〉外のこうした規制要素について、戦争画や現代美術に対して向けられる「芸術にモラルは必要か」という議論を範型として、模型を例に考えてみたのが本稿である。

模型は実物ではなく、あくまで「模型」に過ぎず、趣味の世界である。しかし、趣味だから批判を一切受け付けない、水を差すような物言いあるいは衒学的な批評は野暮であると済ますのでは、この趣味が依って立つところの弱さを露呈しているだけである。模型文化が、批判に耐え得る強度を持っているかどうかが問われている。

注

1. 藤田はメインカルチャーに属する画家であり、小松崎はいわばサブカルチャーのイラストレーターである（ただし、もともと小松崎は日本画家を志望していた）。藤田は戦後、「戦争協力者」として糾弾され日本を追われるが、小松崎は少年誌に寄せた漫画・イラストやプラスチックモデルのボックスアート（箱絵）で人気を博するようになる。
2. ただし、プラモデルのボックスアートは、その「戦争画」との関連性も含めて、よう

やく美術史に位置づけられようとしている。工藤健志ほか編『ボックスアート：プラモデルパッケージ原画と戦後の日本文化』（モマ･コンテンポラリー、2007）参照。また、零戦のプラモデルを素材とした現代美術について、『中ハシ克シゲ展 ZEROs：連鎖する記憶』（朝日新聞社、2006）参照。

3. 正確には、木下直之「聖地移転」（わたしの城下町 20）ちくま 2004 年 8 月号によって知ることになった。
4. 製造したのは産興という地元・広島の企業である。このキットについては、平野克己『もういちど、プラモデル』（ネコ･パブリッシング、2011）103 頁にも言及がある。
5. 国内メーカーとしては大滝や三和、マルサンなどが B-29 のキットを販売していた。平野前掲書 98-100 頁、平野克己『20 世紀飛行機プラモデル大全：平塚コレクションの世界』（文春ネスコ、2004）、同『20 世紀のプラモデル物語』（大日本絵画、2008）127-130 頁など参照。
6. 田宮俊作『田宮模型をつくった人々』（文藝春秋、2004）29 頁、同『伝説のプラモ屋：田宮模型をつくった人々』（文藝春秋、2007）267-268 頁。
7. ただし、プラモデルの開発は数年かかることもあり、実機が（良いニュースであれ悪いニュースであれ）話題になると予想して、発売のタイミングを合わせることが容易に可能とは限らない。アオシマの 1/32 小惑星探査機「はやぶさ」（2010 年 6 月発売）は成功した例と言える。
8. テレビアニメ「ガールズ＆パンツァー」の略称。キャッチコピーは「美少女と戦車が織りなす、ハートフル・タンク・ストーリー！」。2012 年から 2013 年にかけてテレビ放送され、舞台である茨城県大洗町のまちおこしの起爆剤となるなど、大きなブームとなっている。
9. メーカーとしては、たとえ“不謹慎”と受け取られかねない機種であっても、売れる物なら何でも模型化するという態度もあり得、それはただ利益に忠実なだけである。例えば、湾岸戦争やイラク戦争で使用され、ニュースにも登場した現用兵器は話題性もあり、よく売れるであろう。一方、ミリタリーモデルが、ともすれば「戦争玩具」と非難されがちな点にメーカーとして注意を払う記述として、田宮俊作『田宮模型の仕事:木製モデルからミニ四駆まで』（ネスコ、1997）133 頁以下、同『田宮模型の仕事』（文藝春秋、2000）175 頁以下参照。
10. ただし、そこにおいて「人の死」が捨象されていることを指摘する論稿として、坂田謙司「プラモデルと戦争の「知」:「死の不在」とかっこよさ」高井昌吏編『「反戦」と「好戦」のポピュラー・カルチャー：メディア／ジェンダー／ツーリズム』（人文書院、2011）がある。
11. GHQ による航空機の製造や研究を禁止する指令（SCAPIN-301）は模型を含むものであったが、これは趣味や玩具の模型飛行機まで禁止する趣旨のものではなかったというのが現在の通説のようである。『日本プラモデル 50 年史：1958-2008』（日本プラモデル工業協同組合、2008）41-42、102-103 頁、『静岡模型全史：50 人の証言でつづる木製模型からプラモデルの歴史』（静岡模型教材協同組合、2011）150 頁など参照。
12. ガルパンによって初めて戦車を知ることになった若い世代のファンは、こうした“罪悪感”をさほど感じずに済んでいるのかもしれない。というのも、ガルパンの世界においては、戦車による激しい砲撃戦が描かれるものの、決して人が血を流し、死ぬことはないというアニメならではの設定がある。少女たちが取り組んでいるのは、あくまで「戦車道」という武道・スポーツの一種であって、「戦争」や「殺戮」ではないという巧妙なエクスキューズ（これは仲間内

で“ご都合主義”と苦笑いする建前のようなもの）によって､｢戦車＝軍国主義｣といったステレオティピカルな批判をかわしているのである。そのことが、“戦車を好きでいていいんだ”とマニアが自己肯定できる、ガルパンワールドの“居心地良さ”につながっている。しかし、ミリタリーや美少女に対して、“こんなものを好きでいていいのか”と煩悶を抱えながらもひそかに楽しむというスタイルに当然のように慣らされてきた旧世代のファンにとっては、子どもや大洗の人たちが、ほとんど何の抵抗もなく「戦車」が兵器であることをイノセントにスルーし、屈託なくガルパンを受け入れているのが、逆に異様に見え、不安にも感じてしまうのである。「戦車が描かれるアニメ＝不健全、軍国主義」といったガルパンに対する一部の批判や懸念は、ガルパンを一通り観た者ならば、いかにも“上滑り”していることが分かる。ガルパンでは血や死や殺戮が描かれることがないからである。しかし、あえて言えば、戦車戦を描きながらも、血や死が描かれないことのほうが、もう一段上のレベルで不健全だと言えなくもない。ガルパンにおいては､戦車は｢戦車道｣という健全なスポーツに使われる道具としてのみ登場するが、実在した戦車が持っている歴史的背景や文脈を捨象し、戦争と切り離して戦車を正当化・無害化する／できるという態度の倫理性こそが、問われるべきなのである。日本刀や銃器を、その本来の使途を忘れて純粋に美術品として鑑賞できるかという問題とも相似している。ガルパンは2014年に新作の劇場版の公開が予定されている。絶対にあり得なさそうなことではあるが、もしそこに「戦車道で人が死ぬ」描写があったとすれば、ガルパンの作品世界の規律を揺るがし、本当の意味で作品を終わらせることになるであろう。大塚英志の言う「アトムの命題」（キャラクターの傷つく身体）こそが、ドンパチを堂々と描くガルパン世界においては、（エロ描写以上に）最大のタブーとなっているからである。

13. 映画の元になっているのは、模型雑誌モデルグラフィックスでの宮﨑の連載である。

（受付日：2013年9月12日）